〔駒沢女子大学　研究紀要　第17号　p. 287 ～ 298　2010〕

カウンセリングに導入したイメージ体験の変化過程における分析（１）
―MYASによるイメージ内容の語彙の質的分析を中心に―

門　前　豊志子*

A Study of Process Analysis on Therapeutic Imagery Method（１）
― A Qualitative Analysis of Imagery Contents by MVAS ―

Toshiko MONZEN*

問　題

筆者は、MVAS（Monzen's Vocabulary Analysis System；門前語彙分析システム）による語彙分析に挑戦している。このシステムを駆使するには、まだ初心者の段階であるが、内的世界を言葉で表現し、その内容をくみ取って理解していく営みは、カウンセラーとして、あるいは人間理解を基盤として互いを理解する関係が求められる臨床の場では欠くことができない必要十分条件であると考えられる。

すでに、門前（2009）は、心理療法において語彙を分析する試みの意義について述べてきた。今回も引き続きMVASによる語彙分析を通して、カウンセリングに導入したイメージ体験におけるイメージ内容の語彙を質的に分析して、クライエントの内的世界を理解することにする。ここでの語彙とは話された文脈において捉えられる意味をもった語彙を意味する。その語彙によって表現したい意味内容を理解することで、クライエントの内的世界を共有することができると考えられる。

本事例のクライエントは、イメージ体験は初めてであったが、イメージ世界への関心は非常に高く、その意味では、イメージ的世界にはいり易かったのではないかと考えられる。カウンセリングは、約５年間継続して一応の終結に至った。カウンセリングへの来談時は、心身ともに過酷な状態が一段落し、忙しい日常から自分の時間がもてる状態になっていた。しかし、不眠や抑うつ的な気分は続いていて、外出することや人との交流をもつことに心理的な抵抗感があって、やや引っ込みがちで消極的な生活スタイルが続いていた。カウンセリングにおいては、クライエントの話を聴くことが大前提ではあるが、本事例のクライエントは周囲から現実的な役割遂行を求められ、それに否応なく従わざるを得ない生活を余儀なくされてきた。そのため、筆者は、カウンセリング関係を通してクライエントが内的世界を取り戻す必要があるのではないかと考えた。クライエントが自己を見つめて、自己の内的世界の理解を推し進める効

*人文学部 人間関係学科

果的な方法としてイメージを導入することが有効ではないかと考えた。クライエントが、イメージ的世界に非常に入りやすいタイプであったという理由も効果を促進したかもしれない。

門前　進（1995）によると、われわれは二重性を生きているとして、現実の世界の認知と並行して、非現実的な心の世界での生活をしていると述べている。このことから、現実を客観的に捉えることは不可能であるが、心的世界の投影として現実の世界における個々人の認知の特徴を捉えることはできるといえるだろう。

門前（1994；2001；2002）は、内的世界の外界への投影について、情緒状態と「動き」の投影という視点から臨床実験的に検討してきた。異なる情緒状態がイメージ内容に与える影響について、イメージにおける「動き」を投影の指標として「動き」の程度と「動き」の方向性から検討した。その結果、異なる情緒状態群とイメージによる「動き」の程度と「動き」の方向の投影には、快・不快の両群間に有意な差が認められた。快的な情緒状態群の方が、不快な情緒状態群に比べて、「動き」の程度が活発な投影がなされること、「動き」の方向も一方向ではなく多方向の自由な方向での投影がなされること、想起されたイメージ内容も快的で楽しい内容が多く認められることが分った。

このように、内的世界は外界に投影されて個人的な欲求や願望の充足をはかるとともに、良い意味で現実から一時的に逃避する楽しみが、個人の内的世界を拡充させ、心的満足感を増大させる。その心的満足感が、現実への対応に効果的に生かされていくのではないかと考えられる。したがって、何らかの原因によって、現実的な束縛感をつよく感じて、自由な行動や思考が停滞した不適応状態にいるクライエントに対して、それらの状態から解放する有効な手段の一つとして、イメージによる方法が考えられる。イメージによる方法のみを継続するイメージ療法や夢だけでの夢分析による治療法もあるが、筆者は、来談者中心療法によるカウンセリングの中でイメージを用いることによって、個人の抑えられた心的内容を表現する場として有効な治療的な役割を果たすのではないかと考え、カウンセリングにイメージを導入する方法を用いることにした。

目的

本研究はカウンセリングに導入されたイメージ体験において報告されたイメージ内容の語彙を分析して、クライエントの内的世界を理解し、カウンセリングに生かすことを目的とする。すでに述べたように、カウンセリングにおいては、クライエントが内的世界を表現する手段としては、言語による意識レベルでのやり取りが多い。対して、イメージ内容は、意識レベルよりやや深い下意識レベルでの心的内容の投影であるといわれている（河合、1991；門前、1995）。したがって、意識的には表現されなかったイメージ内容の変化過程について、表現されたイメージ内容の質的分析を中心に検討することにした。

方　法

対象　心身症的問題を主訴とする50代女性のクライエントである。本事例のクライエントに関する簡単な成育歴や症状形成の背景については、門前(2009)による論文を参照されたい。

分析期間　X 年～X＋５年の166回に亘るカウンセリング期間の内でイメージを導入したX＋１年～X＋３年の30回を分析対象にする。イメージ体験は全体で76回なされているが、今回は前半30回目までをとりあげた。

分析方法　MVAS（MONZEN'S Vocabulary Analysis System）による方法を用いた。こ

の方法は、門前　進（2008）によって開発されたもので、国立国語研究所の10万語の語彙の分類を基本にして、さらに独自に30万語の語彙を追加分類し、分析するためのプログラムを作成して、独自の科学的な分析方法へと発展させたソフトを使用した。この新しい方法は、心理臨床における語彙の量的・質的解明に役立つと考えられる。

具体的な操作の方法は、前回（門前、2009）と同様であるので、ここでは省略するが、逐語録をエクセル上に転記し、ATOK15のバージョンによる辞書を基にマクロを有効にしながら変換していくことになる。

イメージを導入したカウンセリングの方法について　カウンセリングを、毎週１回、60分施行した後、閉眼状態で、ジェイコブソンのリラクセィション（門前による簡易型）につづいて野原のイメージを10分間施行する。イメージ終了後、イメージ内容を口頭で報告してもらう。報告されたイメージ内容は、逐語録として保存する。毎回逐語録をエクセル上で変換し分析を行った。

結　果

上記の方法で得られた結果を、１．物や状況、人との関係の次元、２．心の知的、情緒的活動の次元、３．生活・自然の表現などの質的３次元に分類して分析をした。

これらの結果は、関係の３次元、心の活動の３次元、自然へのかかわりの３次元およびその他感動の１次元に分けて捉えられる。各次元別に分析した結果を、図１から図７と表１から３に示す。

図１は、関係１（主体の物や事象および状況との関係）と他者との関係および心の活動１におけるイメージ回におけるイメージ内容の比較結果である。

図２は､関係２（物や状況における価値判断･真偽などの関係）の次元と心の活動２の次元におけるイメージ回によるイメージ内容の比較結果である。

図３は、同じく主体の物や状況における真偽と時空間的や量・程度などの物理的関係および心の活動、自然への関心におけるイメージ回におけるイメージ内容の比較結課果である。

図４は、関係の３次元におけるイメージ回におけるイメージ内容の比較結果である。

図５は、心の活動の3次元におけるイメージ回におけるイメージ内容の比較結果である。

図６は、自然の３次元とそのほか（感動）の次元におけるイメージ回におけるイメージ内容の比較結果である。

図７は、心の活動の第２次元と自然の第１次元との関係についてイメージ回におけるイメージ内容の比較結果である。

表１から３は、語彙の全体数における出現比率の結果を示している。この比率を基に、出現比率の高いイメージ回を選んで各次元の特徴と捉えることにした。

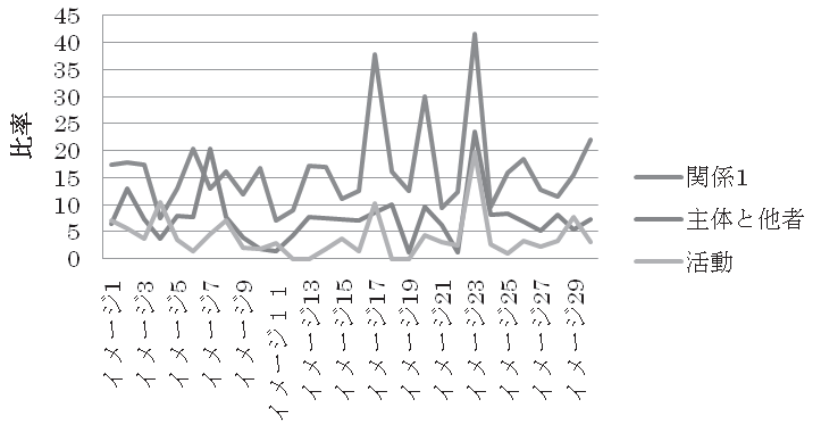

図１　イメージ内容の分析１における比較結果

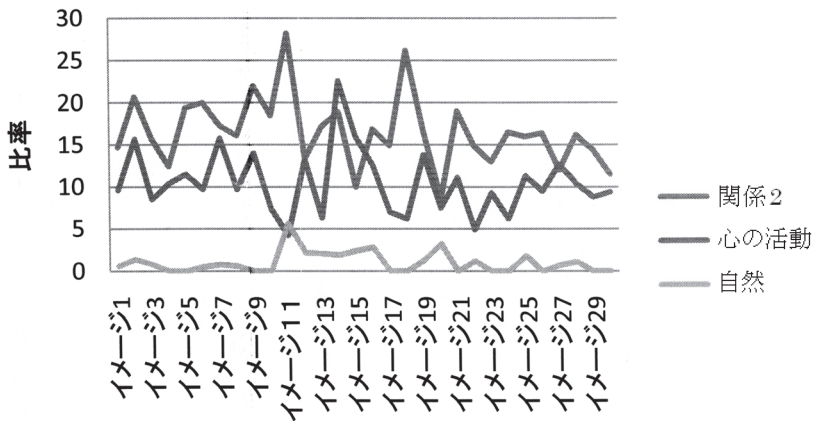

図２　イメージ内容の分析２（価値判断の関係・心の変化他）

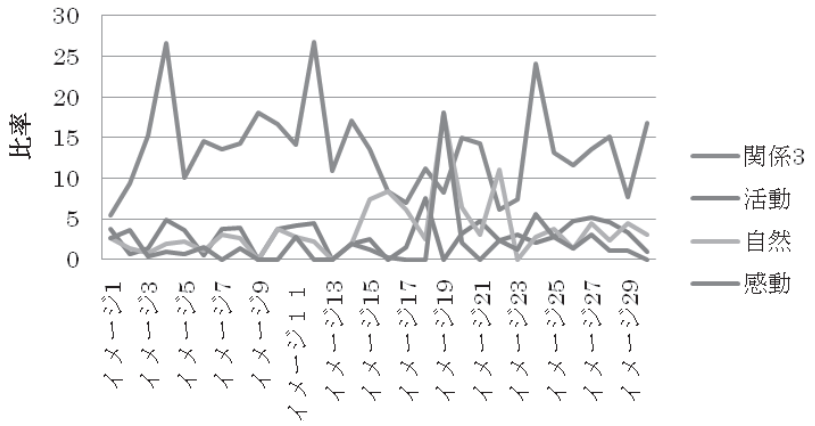

図３　イメージ内容の分析３における比較結果

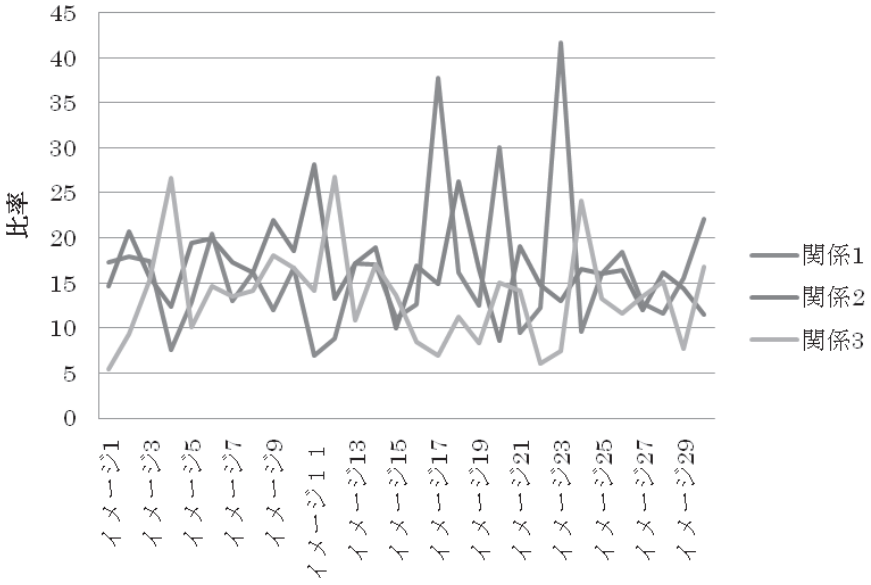

図４　関係の次元におけるイメージ回別比較結果

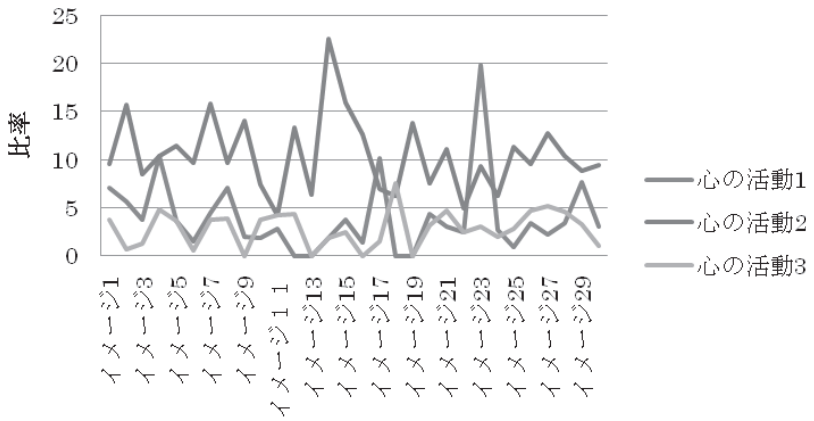

図５　心の活動のイメージ回別比較結果

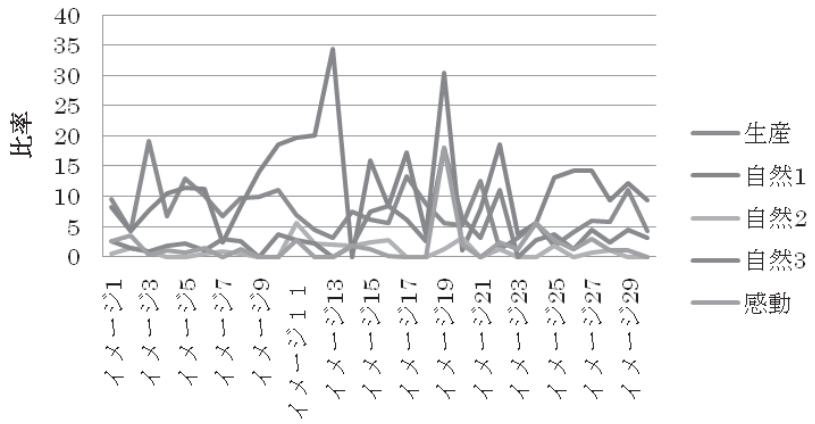

図６　自然など他の次元におけるイメージ回別比較結果

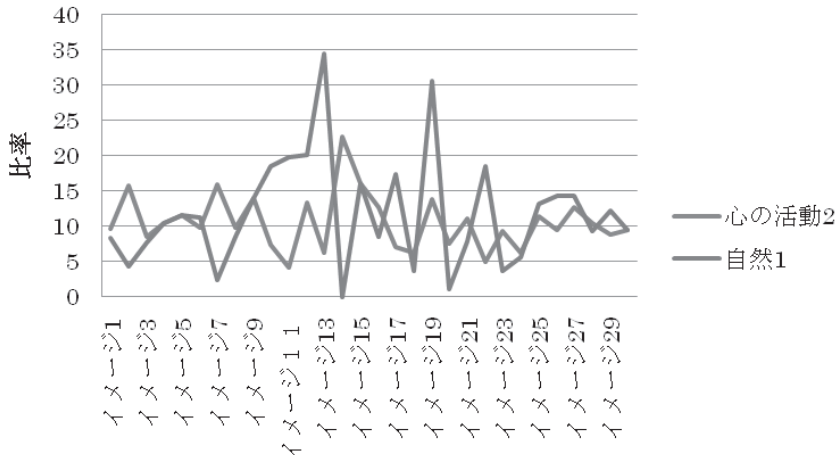

図７　心の活動と自然とのイメージ回別比較結果

表１　関係の３次元におけるイメージ回別結果(％)

	関係１	関係２	関係３
イメージ１	17.3	14.7	5.4
イメージ２	17.9	20.7	9.3
イメージ３	17.4	15.7	15.3
イメージ４	7.6	12.4	26.6
イメージ５	12.9	19.4	10.1
イメージ６	20.4	20	14.6
イメージ７	13	17.3	13.5
イメージ８	16.1	16.1	14.2
イメージ９	12	22	18
イメージ10	16.7	18.5	16.7
イメージ11	7	28.2	14.1
イメージ12	8.9	13.3	26.7
イメージ13	17.2	17.2	10.9
イメージ14	17	18.9	17
イメージ15	11.1	10	13.6
イメージ16	12.6	16.9	8.4
イメージ17	37.7	14.9	7
イメージ18	16.2	26.2	11.2
イメージ19	12.5	16.6	8.3
イメージ20	30.1	8.6	15
イメージ21	9.5	19	14.2
イメージ22	12.3	14.8	6.1
イメージ23	41.6	13	7.4
イメージ24	9.6	16.5	24.1
イメージ25	16	16	13.2
イメージ26	18.4	16.4	11.6
イメージ27	12.7	12	13.5
イメージ28	11.6	16.2	15.1
イメージ29	15.5	14.4	7.7
イメージ30	22.1	11.5	16.8

(20％以上の出現比率について検討を試みた)

表２　心の活動の次元におけるイメージ回別比較(％)

	心の活動１	心の活動２	心の活動３
イメージ１	7.1	9.6	3.8
イメージ２	5.7	15.7	0.7
イメージ３	3.8	8.5	1.3
イメージ４	10.4	10.4	4.8
イメージ５	3.6	11.5	3.6
イメージ６	1.5	9.7	0.5
イメージ７	4.5	15.8	3.8
イメージ８	7.1	9.7	3.9
イメージ９	2	14	0
イメージ10	1.9	7.4	3.7
イメージ11	2.8	4.2	4.2
イメージ12	0	13.3	4.4
イメージ13	0	6.3	0
イメージ14	1.9	22.6	1.9
イメージ15	3.7	16	2.5
イメージ16	1.4	12.6	0
イメージ17	10.2	7	1.5
イメージ18	0	6.2	7.5
イメージ19	0	13.8	0
イメージ20	4.3	7.5	3.2
イメージ21	3.1	11.1	4.7
イメージ22	2.4	4.9	2.4
イメージ23	19.8	9.3	3.1
イメージ24	2.7	6.2	2
イメージ25	0.9	11.3	2.8
イメージ26	3.4	9.5	4.7
イメージ27	2.2	12.7	5.2
イメージ28	3.4	10.4	4.6
イメージ29	7.7	8.8	3.3
イメージ30	3.1	9.4	1

(10％以上の出現比率について検討を試みた)

表３　自然とその他の次元におけるイメージ回別結果（％）

	生　産	自然１	自然２	自然３	感　動
イメージ1	9.6	8.3	0.6	2.6	2.6
イメージ2	4.3	4.3	1.4	1.4	3.6
イメージ3	19.1	7.6	0.8	0.8	0.4
イメージ4	6.7	10.4	0	1.9	1
イメージ5	12.9	11.5	0	2.2	0.7
イメージ6	10.2	11.2	0.5	1.1	1.5
イメージ7	6.8	2.3	0.8	3	0
イメージ8	9.7	8.4	0.6	2.6	1.3
イメージ9	10	14	0	0	0
イメージ10	11.1	18.5	0	3.7	0
イメージ11	7	19.7	5.6	2.8	2.8
イメージ12	4.4	20	2.2	2.2	0
イメージ13	3.1	34.4	2.1	0	0
イメージ14	7.5	0	1.9	1.9	1.9
イメージ15	6.1	16	2.4	7.4	1.2
イメージ16	5.6	8.4	2.8	8.4	0.2
イメージ17	13.3	17.3	0	6.2	0
イメージ18	8.7	3.7	0	2.5	0
イメージ19	5.5	30.5	1.3	18	18
イメージ20	5.3	1	3.2	6.4	2.1
イメージ21	12.6	7.9	0	3.1	0
イメージ22	1.2	18.5	1.2	11.1	2.4
イメージ23	3.1	3.7	0	0	1.2
イメージ24	5.5	5.5	0	2.7	5.5
イメージ25	1.8	13.2	1.8	3.7	2.8
イメージ26	4.1	14.3	0	1.3	1.3
イメージ27	6	14.2	0.7	4.5	3
イメージ28	5.8	9.3	1.1	2.3	1.1
イメージ29	11.1	12.2	0	4.4	1.1
イメージ30	4.2	9.4	0	3.1	0

(15％以上の出現比率について検討を試みた)

1）図１から図３における異なる３次元の相互関係を検討する。

図１から図３では、人や物との関係の次元が最も多いこと、中でもイメージ回の６、17、20、23、30回で顕著に多いことが分かる。次に主体と他者関係の次元が続くが、この次元は、イメージ回の２回、７回の前半の２回と23回に多く出現している。活動の次元はこれらの中で最も出現率が少なく、イメージ４、17、23回に比較的多い。

これらから、イメージ回の前半の６回目までと後半23回に３つの異なる次元が協調したイメージ内容の特徴が表れていると考えられる。

図２からも分かるように、関係の次元が全体として多く出現しているが、心の活動の次元も多くみられるのに対して、自然が非常に少ないことが特徴といえる。関係２は、イメージ６、11、18回に特に多く出現している。心の活動は、全体的に毎回多い。イメージ７、12、14、19回に多いことから、関係２が多く出現した次の回に心の活動が多くなっている。このことから関係２と心の活動２との関係性を考える必要があるのではないかと示唆された。

図３をみてみる。ここでは、明らかに関係３の次元が他の２つの次元に比し全体的に高い出現率を示している。例外として、イメージ19回で感動の次元と自然の次元が関係３の次元を超えて多く出現していることが特徴的である。関係３の次元は、イメージ４、12、24回で、多く出現している。

以上は異なる３次元の関係における結果から明らかになった。次にイメージ回における各次元別特徴について検討する。

2）図４と表１における関係の３次元の結果について

関係の次元は、３つの分類からなる。関係１は、人や物・状況との関係について捉えられる。関係２は、事象の真偽、事象や事物の存在、時空間との関係などが捉えられる。関係３は、関係２と重なる分類以外に物の量の程度や全体と部分との関係が捉えられる。これらの関係とイメージ回における変化をみたのが図４である。この結果から自分の存在感や存在への疑問と自身の帰属感などについて状況との関係で明確にしようとするイメージ内容が、30回の過程の中で６、17、20、23、24と30回に認められていることがわかった。関係２では、イメージ６、11、18回に、真偽の程度や時空間における自己との関係を捉えようとするイメージ内容が多く認められた。関係３では、イメージ４、12、および24回に自然との関係や集団における自己の位置づけをとらえる関係のイメージ内容が顕著に認められたことが分かる。

3）図５と表２における心の活動の次元の結果について

心の活動の１から３の次元における結果は、図５に示される。心の活動の次元は、①知的興味や関心を示す次元と、②喜怒哀楽など情緒的表現の次元および③内的な心の世界をみつめて語る３次元に分けて捉えることができる。

事柄の真偽や自己の存在感の確認が前半イメージ２、４回に見られた後は、イメージの中で気分を解放する情緒的な表現が多くなされている。不安で怖い感じの投影もあるが、心地よさや互いに分かりあえる安心感などが後半では多く投影されていることが判明した。

4）図６・７と表３における自然およびそのほかに関する次元の結果について

自然と生産活動および感動に関する結果は、図６に見られる。この結果からイメージ10回から13と15、17、19、22回目に自然への関心を示

す投影が多くなっていることが分かる。特に19回目では感動が際だって高くなっていることが分かる。図３および図７で見られるように、自然と心の活動との関係をみると、２・４・５・７・９回目までは、自然への関心よりも自然を感じつつも、なぜ自分がこのような場にいるのかという自己の存在の不安定感や疑問などを示すイメージ内容の投影が多くなされている。自然を感じながらも自然に溶け込めない自分に対する不安定感が前面に表現されている結果である。しかし、その後の10回目から19回目にかけて、自然の中にいる自分が、のんびりした気分やゆったりした気分、あるいは、自然のきれいな感覚などを感じるというイメージ内容から、自然と心の活動との融合ともいえる関係ができてきていることが分かる。これらのイメージ体験から内的な心の世界で変化が生じてきていると捉えられるのではないかと考えられる。ただ、すぐに融合的な関係ができあがるのではなく、きれいさと汚さ、みずみずしさと枯れたかんじというようにどちらか一方のみにではなく、相容れない両者の姿や状態を受け入れていける心の状態ができて、変化に対応できる心の準備状態がイメージ体験を通して形成されていったと推察される。

考　察

以上の結果を基にして、イメージ内容について、各次元別にイメージ回との関係性を把握しながら質的な分析で考察する。イメージ内容を次元別に捉えることで、クライエントの内的変化の質的手掛かりを得ることができるのではないかと考えられる。また、クライエントの内的世界での体験がイメージとしてどのように表現されているのかを知ることにより、下意識での心的活動の理解を深めることができると考えられる。

１．関係性の３つの次元で特徴的な結果を示したイメージ内容とイメージ回について考察する。

図４からわかるように、関係１は、自分と状況との関係、自分と人との関係などにおける関係の持ち方をしる指標となる次元である。結果から30回のイメージの後半、17、20、23、30回にかけて関係の持ち方に特徴が示されている。自己が置かれた状況において、状況判断をしながら、その状況の中で、座っている自分から、立ち上がって見ている自分、人と話をしている自分という様に、動いていこうとする自分が体験されていると捉えられる。関係２の次元では、イメージの中での自分が不確かでイメージを見ている自分と見ていない現実の自分の境界がはっきりしない不安な状況から11回目を分岐点としてイメージの世界に入って楽しめる自分の存在を感じている。18回目では、時空間が早く変化する状況に戸惑いを感じるイメージ内容であるが、逆に状況の変化に早く対応していこうとするのではなく、早いペースに対して、自己と周囲との関係の持ち方を考えていくきっかけとなったイメージではないかと捉えられる。

前述したイメージ20回、23回、30回において、時空間における速さの変化の様相に対して、すぐ走ってあわせるのではなくゆっくりとしたペースで動いて、周囲の状況をみながら、人との交流をもっていくことで自己の存在感を確認していっていることが関係３の結果からも明らかになっていることが分かる。ここでは、自然との関係の中で融合し、一体化した自分感覚を経験した後（イメージ４回目）は、自然と離れて観察する自分の存在を堪忍（イメージ12回目）した後、人との関係において自分の居場所を探している集団と個の関係のテーマに入っていき、

関係１でもみられたようにイメージ30回目では、何人かの人と話しをしている自己の存在を感じているといえる。本事例では、状況判断や状況での真偽をしながら、自然との関係をへて、集団における人との関係に移行し、集団の中で自己を位置づける関係の持ち方を模索するイメージへと変化しているのが特徴ではないかと考えられる。

さらに、主体と他者を区別するイメージ的手がかりを検討するために、図７のように主体と他者関係をとりだして考えてみる。この結果を検討すると、イメージ７回目とイメージ23回目で顕著な特徴が認められる。イメージ７回目は、いろいろの国に出かけた経験をもとにイメージの中で国々の違いが表現されている。特に東南アジア系の国の市場の品物や人、中国やモロッコ、エジプトを旅行したときの印象がイメージ内容に語られている。間接的に日本との違いやアジア系ではあるが日本人との違いが暗示されているのではないか。それは日本人としての自己の同一視にもつながっているのではないかと考えられる。23回目のイメージでは、もっと具体的な自分の個人的な内容になっている。家族の中における自己と他者との関係を示していると捉えられる。夫と妻である自分との関係、娘と母親である自分との関係が、野球の応援の話から､広島が好きで､巨人が嫌いな理由などヒーロー性のない球団が良いということや個々の野球選手やコーチにまで話が及び、夫や娘の考えとは違うことがイメージの中ででてきている。このことは、家族の中で、夫と娘は似た考えや共通の興味を持つが自分は違うという自己の家族内における位置づけを表現しているのではないかと捉えられる。その後、この主体感覚は、心の活動と併せて捉えてみるとより明確に把握することができるのではないかと考えられる。

２．心の活動の３次元の結果について考察する。

心の活動の特徴としてみられる顕著な点は、心の活動２で示された次元に現れていると考えられる。この次元の意味するところは、自己自身の存在の疑問と真偽・不安とも言うべき実存的な存在感の認識的側面である。それと同時に存在する主体の状況からの解放の次元である。イメージ２回目は、存在の真偽や疑問を問う不確定な自分をみつめる内容のイメージであった。前述した自己同一性を模索する内容のイメージが４・５・７回と続いて、12回目で日本人としての同一視の後、個としての自己同一視を獲得していく過程に入っていく途上にある心の状態がイメージに反映されているように考えられる。徐々に、慎重に自己の周りを観察しながら、あるいは自然の移り変わりを感じながら、徐々に心が解放されていく過程をたどっていって、27・28・30回目にかけては、他者との心の交流がすこしずつ可能になる段階にまで到達し得たことが分かる。これは、雑談しているけれども互いに分かり合っている感じ（27回）とか、たくさんの人の中で３人ほどの人と話している自分がいる（30回目）というイメージ内容から伺い知ることができる。しかし、まだ積極的に自己を主張する状態ではなく、前に進めない、錨のような重いものが足についてる（28回）と述べられているように本事例では、心の解放状態と身体、特に足の動きとは密接な関係があるように思われる。今後の心の活動の変化過程でその点が確かめられるのではないかと考えられた。

心の活動次元と自然との関係　イメージの前半（４、５、６、10回目）では、比較的現実と近い自然の植物や街に置かれた植木鉢の花などを見て説明する内容が多かった。まだイメージの内的世界に十分入りきれず、現実と近い関係の場面がイメージに導入されたと考えられる。イメージを進めていく過程で、自然は現実の世

界から離れて、内的な世界の自然へと変化していっている。街路樹は山の木立に、植木鉢は満開のサクラや、やや枯れた松や緑のこい松に変わり、荒川のほとりから大きな川やせせらぎなどの自然の風景へと変わってきている。山、川、樹木など典型的な日本の心像風景ともいえるイメージと共に心が徐々に解放されていく様が読み取れる。

本事例のクライエントは、現実の生活でも、植物に関心があり、花を植えて育てたり、花を観賞することが趣味であり、心像風景だけに偏ることなく、現実と非現実の相半ばしたイメージ内容を想起することで、自然との関係においてのんびり感や穏やかさを取り戻し、心の活性化を促すのに役立っていったのではないかと考えられる（図７参照）。

３．語彙分析から捉えた本事例におけるイメージのもつ意義について

本事例ではカウンセリングに導入したイメージ内容について、MVASによって質的分析を試みた。その結果から本事例におけるイメージのもつ意義を捉えてみる。このクライエントは、結婚後しばらくして、義母の介護にあたるよう夫から頼まれ、なぜ自分がそのように介護しないといけないのかという疑問を持ちながらも、良妻賢母としての教育をうけて育ったクライエントにとっては、自分の意志を主張することは罪悪だと考え、懸命に義母がなくなるまで尽くすことになった。義母の死後、現実的には介護から解放されたにもかかわらず、外出できないといううつ的な症状や高血圧・不眠などの症状に悩まされると共に、夫から喪中のはがきを早く書いて出すよう言われた（本人としては怒られたという感覚）ことをきっかけに書痙の症状が出現した。カウンセリングへの来談は、これらの症状の中で、書痙のみがまだかなり残っているということで来談された。したがって、カウンセリングでは、これまでの介護の大変さや夫の家族、義父が学者であるということへの尊敬と、夫に対する、献身と反発のアンビバレンスな感情、実母に対する敬愛と反発などが語られた。それらは、現実的な状況での出来事が中心で、現実のなかで対応していくだけが精一杯の状態であったため、自分自身の時間を全く持つことができなかったということと、相当な自己犠牲をはらった精神的な苦労話が多く語られた。それらの現実生活の中で非現実的なイメージの世界に入ることは、現実ではなかなか入れない自分の世界に浸ることができるという意味で、クライエントにとっては有意義な時間になったと考えられる。

イメージ後のゆったり感やのんびり感は、忘れていた感覚を呼び戻す意味もあり、ずっとこのままでいたいという感想がよく述べられ、イメージの世界にひたる心地よさが現実の煩わしさからの解放に役立ったと考えられる。さらにイメージの世界での体験が、現実とは異なる非現実的な世界で、自分自身を見つめ、考える方向へと徐々に導かれて移行していくことにつながっていったと考えられる。自己の有り様についても、最初は自己の存在の疑問からはじまり、次に、傍観者的立場から、眺め、観察する自分がいて、他者との関係の中で表現できる自分を感じる段階へと変化していっている。この心の世界の広がりと解放感が来談時では、すでに夫と実母は亡くなっていたため、クライエント自身が依って立つ目標や方向性を無意識的に模索していた時期と呼応してクライエントの今後の生き方に役立っていったように思われる。

今後の検討

イメージ内容を質的に分析することで、改めて、クライエントの内的世界の流れを知る大きな手がかりを得ることができた。今後もさらに

詳しく検討して分析を進めていければと考えている。

（本稿は第74回日本心理学会（2010）において発表した論文を加筆し、修正したものである。本文中のクライエントから、公表に関して快い承諾をえたことをつけ加え、感謝を表したい）

参考・引用文献

河合　隼雄　1986　心理療法論考　新曜社

河合　隼雄　1991　イメージの心理学　青土社

水島　恵一・小川　捷之　1984　イメージの臨床心理学　誠信書房

水島　恵一　1992　イメージ・芸術療法　大日本図書

門前　進　1995　イメージ自己体験法―心を味わい豊かにするために　誠信書房

門前　進　2008　電子書籍　臨床心理学における科学的シングルケースへの挑戦語彙分析プログラム　MVAS サンプル版　門前研究所

門前　豊志子　1994　情緒状態と動きの投影（3）―動きを感じる群と感じない群におけるイメージのちがいについて　信州豊南女子短期大学紀要　第11号　49-63。

門前　豊志子　2001「動けない」イメージに投影された束縛感から解放されるまでの心理療法の過程―中年女性について　秋草学園短期大学紀要　第10号172-180。

門前　豊志子　2002　不快な情緒状態において想起されたイメージと不快感の関係について―実験的アプローチ　秋草学園短期大学紀要　第11号　158-168。

門前　豊志子　2009　カウンセリングに導入したイメージ体験の変化過程における分析―MVAS（門前語彙分析システム）への挑戦―その序　駒沢女子大学「研究紀要」 第16号　1195-208。